



# ねっせわーく

■授業改善シリーズ No.2 「教える段階」

22. 6. 7 No.6

「教える（教えた）」ことが、「考えさせる」ための知識になっているか。  
 「教える」と言いながら、一方的に教師が話し続けているか。  
 子どもが、きちんとついてきているか。無表情になっていないか。  
 うーん、「教える」って難しい…。



### 「教える段階」のポイントやアイデア

- ・とにかく、ねらい（ポイント）をしぼる。
- ・具体物などを用いたていねいな説明で。  
「ていねいな」→ 気をひくような資料提示の工夫等
- ・理解状況をモニターしながらの説明で。（≒対話）

そのために、育てなければならぬこと

### ◎発達段階に応じた「聞き方上手な子」

#### <目に見える姿勢>

うんうんとうなずきながら聞く、話す人を見ている…

#### <目に見えない姿勢>

自分の考えと比較しながら聞いている…

## 2

## 1 子どもの「知っているよ」にたじろがなくなる

授業を始めて順調に進んでいると思っていた矢先に、「先生これ知っているよ」「塾でならったもん。この答えはね……」と言われて焦ったことはないだろうか。

「教えて考えさせる授業」では、学習内容を子どもに予習させたり教師から説明したりすることから始まるから、このような焦りとは縁が遠くなる。

## 2 子どもが焦点的、分析的に見たり考えたりしようとする

授業中に、ピントのずれた子どもの発言にとまどった経験はないだろうか。「教えて考えさせる授業」ではこのようなことが起きない。事前に考える枠組みをもつからだ。

例えば4年理科「水と温度」で、熱して沸騰した水の中から出てくる泡を観察させるとき、「この泡は空気である」という見方をする子どもは少なくない。このようにして一度形成された子どもの誤概念を修正するのはなかなか難しい。そこで、実験をする前に「泡の正体は水蒸気だ」と教えてしまう。すると子どもたちは、実験から見つかる目の前のさまざまな現象を水蒸気の性質と結びつけてとらえることができるようになる。

つまり、「眺める」や「見る」レベルではなく、焦点化を伴った「観察」レベルからのスタートとなる。ある先生は、理科の授業で「子どもの実験への見方が鋭くなった」と言っている。

## 3 日ごろ発言しない子どもも発言する

日ごろ手を挙げない子どもも発言しようとする。これは感動的である。教師が説明するから、あるいは事前に学習しているからあたりまえだと言うのは簡単だが、現実には手を挙げる姿を見ることがうれしくなる。

## 4 子どもが新しい発見に満足する

理解や思考を深める発問・課題により、教科書にはない新しい発見につながる。5年理科の「左右のつり合い」で言うなら、「先生、支点からの距離は整数だけじゃないんだね。1.5のように小数でもいい」であり、5年算数の「小数と整数のかけ算」の場合だと、「10倍して $\frac{1}{10}$ にするだけでなく100倍して $\frac{1}{100}$ しても解けるんだ。なるほどなあ。でも10倍して $\frac{1}{10}$ にするほうが便利だな」がそれに当たる。

## 5 教科書通りにやっても授業が盛り上がる

理科を例にとりて説明しよう。教科書には“静止画像”があり、結論も書いてある。しかし、例えば「水溶液の性質」で塩酸にアルミニウムを入れる場面で、目の前で起きる時系列的な変化の様子までは詳しく書かれていないので、新鮮な気持ちになって「あーっ、アルミニウムの消え方が速い！」などと観察していく。知った知識をもとに詳しく見ようと意欲的になるのだ。

## 6 子どもの学習機会が増える

一般的に多く実践されている「どちらかという新鮮な出会いと発見を求める授業」は、予習・復習を視野に入れない「授業完結型」と言ってもよい。しかしその場合、学習機会は1回きりで、塾にも行かずに真面目に授業を受けている子どもがテストで振るわないときがある。それが宿題を出すことにもつながるのだが、出したら出したで教師は宿題の処理に追われて授業が遅れ気味となり、授業時間の確保に苦慮するはめになって宿題を手控えたりする。その結果、学力の定着に悩むこととなる。

一方、「教えて考えさせる授業」では、予習あるいは復習も視野に入れるので、数回の学習機会を得る。これは、小さなことだけれども積み重なると大きい。



図2 「教えて考えさせる授業」のメリット